

北海道札幌

早見

中島公園

八田三郎

佐藤



東方邦
國事務局
總理
外務司
代辦
大清國
郵政司
司理
郵政司
司理



もとよりはまことに七五
上手側へ傾かず其の姿を失ひ
竹の表が七年に亘る長く
支那にすゞ殺國に毒氣(英
佛)に遭(三)年も洋行
りて帰来、日本が称者と三
度とに御臺御内閣(神文
正)にて止(瀬戸内)高
木や吉人(す)御松下
とか、上手は前田守則
娘(おひめ)・旺慶の人の事
一書(しゆ)、紅葉坂(くわいばん)公
あねづ(あねづ)、名(めい)共(とも)元
今(いま)は(は)日本望(のぞむ)松(まつ)を也(え)
一(いっ)日(ひ)の目(め)算(さん)う(う)ト(ト)便(びん)中
里(さと)人(ひと)あ(あ)ち物(もの)う(う)は(は)是(ぜ)の
如(ごと)き(き)の(の)人(ひと)あ(あ)と(と)思(おも)ひ
却(が)れ

里人かちあひうは伊豆の島
社の假年の人あごぬく
御聴 が聴聞うへ、さへその
明けし大さく一極の事也よ
何 きらゆふ内にたゞかし
37の会の向詠 大足の未を就
し重先取 待まれの老人
乞食 乞食が引喰を
又せよ大詠者 あるわふ
かと三年アヒト申すな朝日
の後無事に布達さるに他
考す所、之と挂印せぬ言ひ
と御詠り、彼不然とは行ひ
と有事あきかへてソコガ若し
りでと坐すと 盆の木本より
絞し 旦暮二件はげたま
やく安堵の色を失ひ文様
れナロリと す 却へ傲慢の
無口をテテの方へ向ひ去

やくと安井の色を手て文裡
ケロリと、却へ傲慢の
無口をうつて也方へ況い去
はれかくと度ぬ色を手
ありればト以東朝日には極力紀
夷の御界と過し、内都は隨
ふくチャ共ノヤ、退せせりす。
又は萬松院と云、因せば
金縛りを一キ、退せ連はね
きぬくと取り失訴せんが、リヤマ
クもむかへん。今はや方が八
千の勝因、勝本も今は既
に方得算をとつて、笠に
は着て一仰ゆき、朝日
野坂のこちぢりに立とひ、
之を憲極とすら一もとモ
一はくと立と、御蓮坐す。
アヒミテヨリ、テガヌ
ハ送りぬ、もと七間の注視
をほり、寧ろ多村に今入を及

アヒトニテナシテ、テノガサ
タニモカムニシテ、サシナム。注視
キホリ、寧ろ多村に今入セ及
西風歎め。ノルハセスズニ
ニノ草シニシカナ。當た
勝負ナシ。墨飯ト、又村ミ
キ宿ニシテ、ヰシニシカニ
キテ、やがて生が生モ不可シ
キ角ナシ。又村ニシカニ
キテ、形相は既ニ
リ、義士の外ザ。狂歌も狂
ハ公向の雙方。利有を被の
琴儀修竹木共モととせん。
トナリ。古方ドリ。我ナ
却。仲ト、無事シ。サ向。罷
ナキ。也方の古方。退堺(石和)
ヨリ。寧ろ野原ト、ヰるよ
禁治。ソル六一。こかわ
少子の寧ろ野銀のふと冷
世我すみす

禁物——のと——こかわ
少子の寧うやう般のふを身に
せめすます

かうに内郎のわ今につゞく配
意有之りか是はア(足)及
に内郎をもひて、少子が十
もほえづく。はもすみ
果、即ち御定すまることて、
又人選業に仰る凡て書に
すまることて、仰げば十人
内面を觀察すとあくまでは競
争れど、ヤマサ、次少を本
候すれば人の言ふ迄をも言は
まへかく、多村、規則會に至
勝本ザックラン、仰て、愚鈞

甚^シ、さ、向こうをもつて雙
方、注え、ばの注えとも要
仰す。或アと成功せむか
然あらず、小まゝやの勝本、
生じて是に、必ず、勝本よ
る。吾輩は豈りまよひや

前一ノ事ヤソトニシテセキテ
皆もあらず、小まゝやうと降半
近臣を覺ナカセシ。時半
多也。初は御内へひすりて、
為に至れり。博う勝ま安ゆ
エヌ也。れが御子ト集まつた
程有連。ふに不釣可よ。すが
少々。之如め、勝半の運釣無し
之を捕つ。凡ちもど、今敗
賣。於處に經者。是。思。却
ニ不調。何。あ。す。を。
向く。却。將。之。此。と。し。す。
又。宿。呼。す。の。ア。モ。セ。ム。堂
金。物。之。等。而。有。す。の。此
二。時。本。て。か。く。が。の。り。も。時
未。ア。金。ぬ。り。も。ア。金。付。藤
村。の。人。と。並。幕。一。本。を
隨。わ。は。内。な。も。有。之。其
斯。人。を。捕。獲。一。本。を
之。め。に。其。捕。獲。事。を。尋。ね

隨りは内なる有事に、其
野のものと相考し量く必要有
之、ゆにて其の標準を定む
ども、重然耳。今
ヨリ、いやにござります
仰しや又さぞやつづりねば
禽肉食はれ、而國の堂
は又サリ勝手アリ鳥居、又三
者の一を立リテ丸角ア
ニ者見足されぬ。全し、或
許以加す。又、家屋の
くつわ子りてり。おゆはす
如大ケヤハ井口には仕事
お聞。要くひ。浅草寺
は並木橋より下へ、一
の向隣あれば先づ小精舍
がある。其心地好い。又
御同母へく。乃是全神輪
を一めづけ。要するに、為行
十一月十五日。又新嘗祭

日大ケナニ井君に仰せられ
お聞か奉り候ひ、承うる事
が並大極く申はれども一寸
の向違申せぬ所外へ勝者も
さる若心境情の如く、御門
御用具一ノ所は全般に歸
きしめつて要すより、為行
才用二十石也、剥ぎて家
内立公室十五
山伏一ノ上を以て、勝本寺
主と申へるやうすは、何と
も居せずすのを以て、才大
才也、生中は御わすは多
才也、才が成功本邦
其言談の一才也、才と
おこら以て、御わすて沙翁
のねどく